

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370450

研究課題名(和文) サンスクリット語子音変化--多様性の解明に向けて

研究課題名(英文) Consonant changes in Sanskrit: towards an explanatory account for the diversity

## 研究代表者

鈴木 保子 (Suzuki, Yasuo)

関西外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00330225

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトではサンスクリット語の子音現象のうち、半母音の多様性・重子音化・歯擦音のそり舌化の3つの現象を対象とした。解釈の基盤となる視点は、まず音韻現象の解明では抽象的な韻律構造ではなく子音の調音的特徴、特に口腔ジェスチャー、および聴覚的特徴を重視した分析である。また、歴史的な変化の多様性・特異性の解釈として、その一つ一つは一般的である複数の要因の相互作用および複数の変化の融合という筋書きを提示し、いたずらに全体を簡潔化の型に押し込むことは避けた。これらの成果は申請時の仮説をほぼ論証しており、従来問題視されてきた現象の解釈にも有意義な貢献をすることができたと考える。

研究成果の概要(英文)：Among various phonological phenomena involving consonants in Sanskrit, the current project concerns the class of semivowels, gemination, and sibilant retroflexion. From the synchronic aspect, the interpretation and analysis are based on the articulatory and perceptual properties of consonants, especially oral gestures, rather than the abstract prosodic structure. From the diachronic perspective, diversity and idiosyncrasy as observed in gemination and sibilant retroflexion result from the interaction of several independent factors, each of which is commonly observed, and the merger of a series of processes with the identical outcomes. The conclusions obtained through the current project, which support the hypotheses of the research proposal at the time of grant application, contribute to the interpretation of the phenomena that have been considered problematical.

研究分野：歴史言語学

キーワード：サンスクリット語 子音変化 子音結合 半母音 重子音化 RUKI 中期インド・アリア語 同化

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 古代インドのサンスクリット語は子音が豊富で体系的であるのに加えて、語末子音の弱化や同化、歯擦音のそり舌化など、他の諸言語には見られないような広範な現象や理論音韻論の枠組の構築の根拠または反例となるような音韻論的に興味深い現象が存在し、先行研究でも議論されることが多い。しかし、残念ながら理論音韻論の枠組みでの研究は通常2次・3次文献にもとづく分析で、部分的に言語事実に誤りがあったり関連現象を網羅的に扱っていなかったりで妥当性を欠く。

(2) 本プロジェクトは、パーリ語の一連の子音変化を音節構造をもとに統一的にあつかった、Suzuki (2002) に端を発する。パーリ語をはじめとする中期インド・アーリア語の発達形とサンスクリット語の重子音化との類似性は以前より指摘されており、重子音化に関心を持ったが、その成果を2009年9月には第14回国際サンスクリット学会で発表、Suzuki (2012)として出版、さらに重子音化に関する論考を進めたものを2013年1月に国際音声学音韻論学会(国立国語研究所主催)にて口頭発表を行った。また、重子音化に関連して、アヌスヴァーラの音声的特徴と音韻的位置づけに関する論考を2012年3月にアメリカ東洋学会で発表、Suzuki (2013)として出版した。他の研究テーマである半母音の非対称性は、この論考を進める中で着想を得、歯擦音のそり舌化は特異な環境のため以前より関心を持っており、関連文献を読んだりして見解があり、独自の解釈が提示できると考えていた。

### 2. 研究の目的

(1) 理論音韻論の文献で論じられることが多いサンスクリット語の同化など子音現象の多様性が調音・聴覚・音響の音声的要因という多面性に由来するものであって、音節構造やきこえ度の階層など抽象的な韻律構造によって単一的に決められるのではないことを論証し、音韻現象一般の理解に貢献する。

(2) 重子音化や歯擦音のそり舌化のように一見奇異に見える現象はもともと複数のより小規模な過程が集積したものである多重性に起因することを実証する。いずれも古インド・アーリア語期に進行中の変化であり、単一の要因により簡潔性を重視した分析では適切に扱うことができない。多様性を重視した、特異な現象の解釈により音韻現象一般および言語変化の理解への貢献を目指す。

### 3. 研究の方法

3年間のプロジェクトで年度ごとに異なるテーマを扱い、平成25年度は重子音化、26年度は半母音の非対称性、27年度はRUKIまたは歯擦音のそり舌化の予定であった。諸般の事情により、25年度は重子音化と半母音の多様性を並行して扱い、26年度は重子音化、

27年度は歯擦音のそり舌化を研究対象とした。本プロジェクトは文献に基づく研究である。Whitney (1889), Wackernagel (1896)などの文法書やAllen (1953, 1962)などの研究書、その他個別現象の研究論文をもとにして、歯擦音のそり舌化についてはリグヴェーダのテキストを調査した。

### 4. 研究成果

#### (1) 半母音の多様性

サンスクリット語の半母音は y r l v、すなわち接近音/流音と渡り音からなるが、いずれも音節主音になることができるため伝統文法では1つの調音方法のグループをなす。ところが、次のように実際には様々な音韻現象で異なる。

#### ① 頭子音結合

音節内部での子音の配列は一般にきこえ度によると考えられている。すなわち、調音方法のグループにより、閉鎖音-摩擦音-鼻音-流音-渡り音-母音の順にきこえ度が大きくなるが、最もきこえ度が大きい音節主音により近い子音の方がきこえ度が大きい。サンスクリット語の頭子音結合にはこのきこえ度の法則を守っているものもあるが、2つの半母音からなる vy- vr- vl-がある。これらは一般的な分類では渡り音 v と渡り音 y または流音 r l からなるもので、きこえ度の法則の反例となる。これらの頭子音結合は v が音韻的には半母音であるが音声的には唇歯摩擦音であることにより、渡り音 y・流音 r l の前に生起することが可能であると説明することができる。半母音のみからなる頭子音結合のうち vl-は稀であるため、vy- vr-に基づいて v > y r という階層(前の方がより子音的)を確立することができる。

#### ② 連声規則

語間の連声規則では4つの半母音が同じような変化を見せるのではなく、r は歯擦音 s と交替し、l は閉鎖音と同じような変化をする(Whitney 1886, Wackernagel 1896 他参照)。まず語末に半母音が生起して連声規則の入力となる場合であるが、r s とともにほとんどの有声音の前で r であるのに対して、無声音の前では s になるというように声の同化により r と s は交替する。一方、半母音が連声規則の条件となる場合は、初期の古インド・アーリア語では r の前のみ語末の鼻音が脱口腔化によりアヌスヴァーラになったのに対して y l v の前の鼻音は鼻音性を保持したまま同化して  $\tilde{y} \sim l \tilde{v}$  となった。後に y v の前でも r 同様鼻音はアヌスヴァーラになったのに対して、l の前のみ口腔ジェスチャーの同化が見られたが、これは閉鎖音の前でも同様の変化が起こる。よって、語間の連声規則は同化を引き起こす程度の順に l > y v > r という階層(前の方がより程度が大きい)を含意するが、これは r が4つの半母音の中で最も開口度が大きいものに対して l は閉鎖音同様口腔内に接触があるという調音上の特徴に基

づくものであろう。

### ③重子音化

サンスクリット語の子音結合では r h の後の子音または 1 番目の子音が重子音になるが (Varma 1929, Cardona 2013 参照)、変化する子音は調音方法により規定することができる。具体的には、閉鎖音が最も重子音になりやすく、次は鼻音であり、歯擦音は重子音化の対象になりにくいというように、最も重子音になりやすいのは口腔内に閉鎖がある子音、次に口腔内に狭窄がある子音である。他方、h ḥ ṁ のように固有の口腔ジェスチャーを欠く子音は重子音にならない。ところが、半母音は個別に重子音化の対象になる度合いが異なる。まず、r は重子音にならない。次に、他の半母音は共起する子音によっては重子音になるが、y は ry でのみ重子音化するのに対して、v は vy > vvy、さらに l v と閉鎖音や鼻音の組み合わせでは l v の方が重子音になることもあり (2) (iid) 参照)、4 つの半母音の中では最も子音的である。半母音同士の子音結合 ry vy ではそれぞれ ryy vvy となる。これらの事実から重子音になりやすさに基づいて l v > y > r という階層を設定することができる。重子音化における半母音の異なる音韻現象は口腔ジェスチャーの違いに起因すると考えられる。l v は①②で述べたように阻害音同様口腔内に接触や狭窄があるのに対して、r の場合はおそらく開口度が他の子音に比較して大きいのであろう。

### ④中期インド・アリア語の同化

中期インド・アリア語では古期から引き継いだ大部分の子音結合が完全同化により重子音になった (von Hinüber 2001 他参照)。この同化は一般的な同化のように方向性のあるものではなく、調音方法によりどちらの子音が同化されるかが決まる。具体的には閉鎖音が最も出力として残りやすく次に摩擦音や鼻音、半母音は最も同化されやすいが、異なる閉鎖音からなる子音結合では逆行同化となる。ところが、異なる半母音からなる子音結合では l > v > y > r の順に出力として残りやすい。中期インド・アリア語の同化はサンスクリット語の音韻現象より後の時期であるため、2 つの現象は別個の原則によるとも考えられるが、より後の時期の同化によりサンスクリット語の上記 3 現象と合致する階層が得られるのは注目に値する。

⑤古期から中期インド・アリア語の音韻現象に基づき、上記①により v > y r、②により l > y v > r、③により l v > y > r、④により l > v > y > r という子音性の階層が得られるが、これらを纏めると l > v > y > r となる。この階層はすでに述べたように、それぞれの半母音の調音に基づくものである。

### (2) 重子音化

サンスクリット語の重子音化は Varma (1929) および Cardona (2013) に詳細に述べられているように伝統文法では子音結合の最初の子

音または r h の後の子音が対象とされているが、実際には音素配列上排除される子音結合もあるので調音方法に基づいて規定することができる。まず 1 番目の子音が重子音になるのは子音の前の閉鎖音 (ia)、歯擦音と半母音からなる子音結合 (ib) および vy (ic) である。

(i) a. *sapta-* > *sapp̄ta-*, *agni-* > *aggn̄i-*,  
*adya* > *addya*, *cakra-* > *cakk̄ra-*, *cakṣuḥ* >  
*cakk̄ṣuḥ*

b. *viśvataḥ* > *viśśvataḥ*, *amuṣya* >  
*amuṣṣya*

c. *daivyā* > *daivvyā*

他方、2 番目の子音が重子音になる場合は音声学書が規定するように r h の後であるが、r の後ろに生起する子音には制約はないものの h の後ろで重子音化するのは鼻音か半母音に限定される (それぞれ (iia), (iib) 参照)。他に 2 番目の子音が重子音になるのは (iic) のように摩擦音の後の閉鎖音または鼻音、(iid) のように l の後の閉鎖音、v の後の鼻音であるが、この場合は最初の l v が重子音になることもある。

(ii) a. *art̄ha-* > *art̄t̄ha-*, *ūrmiṇīḥ* >  
*ūrmmiṇīḥ* *varṣya-* > *varṣṣya-*, *sūryasya* >  
*sūryyasya*,

b. *jihma-* > *jihmma-*, *bahvīḥ* > *bahvvīḥ*

c. *aṣṭābīḥ* > *aṣṭt̄ābīḥ* cf. *aṣṣṭābīḥ*,  
*viṣṇoḥ kramah* > *viṣṇṇoḥkkramah*

d. *kalpān* > *kalppān* cf. *kallpān*,  
*vib̄udāvne* > *vib̄udāv̄nne* cf. *vib̄udāv̄vne*

サンスクリット語の重子音化は音声学書により異なる記述もあり、方言により多様であったことがうかがえるが、他にも入力や条件に様々な制約があったり規定はあるものの例外も多い。まず、入力はもともと重子音にならない r h およびヴィサルガ・アヌスヴァーラは除外される。歯擦音は重子音にならないとする音声学書もあるが、母音の前でのみ重子音にならないとする場合もある。他に重子音化が適用しないのは、重子音や調音点を同じくする鼻音と閉鎖音の連続、さらに音声学書によっては異なる閉鎖音の連続における重子音化を除外するものもある。

他方、重子音化の環境に対する制約としては母音間では重子音化は起こらないが、これは通言語的には重子音化は母音間で起こりやすいという傾向に鑑みると特徴的である。環境に関する他の制約としては長母音の後、3 個以上の子音からなる子音結合では起こらないとする場合もあるが、これらは明らかに音節の長さに対する制約である。また、流音が音節主音である場合重子音化が起こらないのも、Varma (1929) が述べるように流音が子音・母音の両価的であるため母音として機能している場合でも子音として子音結合の一部とみなされ、子音結合の数に関する制約に抵触するためであろう。さらに、ヤマの前の子音は重子音にならないとされたり、1 つの子音結合の中で重子音化が適用するの

は1回のみというのも子音結合の長さに対する制約とみられる。異なる制約としては発話の最初や最後、より限定的に語末で重子音化が禁じられる場合がある。

Blevins (2004)の通言語的な研究では、重子音化が起こりやすいのはアクセントがある音節または句末の位置とされるが、サンスクリット語の重子音化はこのいずれにも当てはまらない。また、サンスクリット語の重子音化は子音結合のみで起こるが、一般的には母音間の単一の子音の方が重子音になりやすい。他方、通言語的には他の調音方法に比較して閉鎖音が重子音になりやすいが、この点はサンスクリット語の重子音化と合致する。サンスクリット語重子音化の先行研究では音節構造に基づく分析を提示しており、例えば Hock (1991)は母音間の子音結合で重子音化がみられるのは分節が VC-CV と V-CCV の両価性に起因するとしているが、V-CCV の分節が不可能な場合もあり、サンスクリット語の様々な重子音化の例を統一的に説明するのは困難である。

サンスクリット語重子音化の複雑さ・多様性を解明するには複数の要因・複数の起源を仮定するのが妥当である。まず、様々な音声学書に共通する2つの傾向、子音結合の1番目の子音と r h の後の子音の重子音化は有意義な一般化と見るべきであるが、そのうち1番目の子音の重子音化に関しては、母音の前の位置に対して子音の前の位置で子音が調音的に困難で聴覚的に不明瞭になるため母音挿入や子音削除などの解決策がとられることは音韻現象の音声的解釈を基盤とする Côté (2000)や Blevins (2004)など多数の研究が論証している。重子音化も同様に子音の前の子音を聴覚的により明確にするものと解釈できる。また、r h の後の子音は頭子音であり、頭子音の強化は頻繁に起こる現象であることと合致する。hvayāmi > **hh**vayāmi, scotanti > **ss**cotanti など例外的な摩擦音の重子音化は音節の最初の子音または語頭子音の強化であると解釈するのが妥当であろう。さらに、サンスクリット語の重子音化で唯一通言語的な傾向と一致する特徴である、特定の口腔ジェスチャーを欠く子音よりそれがある子音、狭窄のある子音より閉鎖のある子音の方が重子音化しやすいが、口腔ジェスチャー、特に閉鎖の延長の傾向である。このような複合的な現象が生じたのは、重子音化が歴史的に複数の独立した過程が融合したためであろう。具体的には、閉鎖音の重子音化、r の後の子音の重子音化、半母音の前の摩擦音の重子音化、子音の後ろの位置での頭子音の重子音化など（おそらく部分的に重なる）複数の過程が別々に発達した結果、他に類を見ない広範囲の重子音化が生じたものであろう。

サンスクリット語の重子音化は、語間の連声規則やそり舌化、重複などサンスクリット語の音韻現象の中では比較的注目されるこ

とが少ないものの特異性を有する興味深い現象で、従来の音節構造に基づく分析では扱いきれなかった。本プロジェクトでは複合的な現象として捉えて、より記述的妥当性の高い、それぞれの要因が独立した根拠のある現象として解釈し、重子音化の特異性が普遍的特徴の相互作用によることを示した。3つの傾向、すなわち、頭子音の強化、口腔ジェスチャー（特に閉鎖）の延長、子音の前の子音の明確化という複数の要因の相互作用による、また起源的には複数の独立した重子音化の過程が融合したものであるという解釈は、多様性を含めて重子音化の現象全体の理解に有益であると考えられる。口腔ジェスチャーの延長は Suzuki (2012)にも述べられているように、子音結合における母音挿入や子音挿入とも共通するサンスクリット語の一般的な傾向である。

### (3) 歯擦音のそり舌化

Whitney (1889), Wackernagel (1896)など文法書に詳細に述べられているように、前インド・アーリア語で歯擦音 s は子音の r k および a 以外の母音の後ろで歯音からそり舌音に変化している。同様の現象はイラン語派・バルト語派・スラブ語派にも見られるため、分化する以前の変化または地域的な現象と見られるが、言語による違いも存在する。その特異な環境により歴史言語学でも生成音韻論でも注目されており、条件の r u k i が自然類をなすか、複数起源ではないかとの解釈もある。

#### ①条件

サンスクリット語の歯擦音のそり舌化を引き起こすのは母音では a/ā 以外のすべて、子音では r k のみである。これらの音は一見共通する音声特徴を欠いており、不自然な集合に見えるが、実際には子音の中には歯擦音の前に生起しない音は多い。そり舌化の具体例として、(ia)は前の音が後ろの歯擦音のそり舌化を誘発する例、(ib)は a/ā, t̪, t, p が s の前の位置でもそり舌化を引き起こさない例、さらに(ic)はヴィサルガとアヌスヴァーラはそれ自身後の s のそり舌化を引き起こさないものの前の母音によるそり舌化を阻止しない例である。

(i) a. agnīṣu, dhenúṣu, vākṣú, gīrṣu  
b. vadaśi, senāsu; divīṣu, marútsu, apśu  
c. mānaḥsu vs. haviḥṣu, dhanuḥṣu  
vidvā́ mśam vs. haví mśi, parā́ mśi

そり舌化を誘発する母音は a/ā 以外であるが、サンスクリット語の中母音 e o はそれぞれ二重母音 ai au から発達しており、この母音変化は s のそり舌化より後の時期の変化とみられるため、そり舌化が最初に起こった時点では直前の母音が高母音 i u のいずれかであったはずである。従って、s の前でそり舌化を引き起こす母音は i u と r̥/r̥̄ であるが、子音 r もそり舌化を引き起こす。i は硬口蓋音、u は唇軟口蓋音、r̥/r̥̄ はそり舌音でいず

れも歯音 s の位置より後ろにあるため、調音点の後退により s がそり舌音になるのである。a/a も調音点では歯音より後ろであるが、一般に高母音は口蓋化など前後の子音の調音点の同化を引き起こすのに対して中・低母音は同様の傾向がほとんど見られない (Kochetov 2011)。

次に子音の方はほとんどが s の前に生起しないものの、s の前に生起するもののうち k r がそり舌化を引き起こし、 $\text{ʈ}$ , t, p, s が引き起こさない。k r は一見共通点がないように思われるが、s の前に生起しない子音を除外するとそり舌化を引き起こす子音の調音点はより後ろの方であるのに対して引き起こさない子音はより調音点が前の方である。唯一問題点はそり舌化を引き起こす r と引き起こさない  $\text{ʈ}$  がいずれもそり舌で同じであることだが、これは調音方法に起因すると考えられる。すなわち、r は調音の際一貫してそり舌を保つことができるが、 $\text{ʈ}$  は閉鎖がそり舌であるのに対して解放の際は舌尖がより前の位置に移動するため後ろの s と接する時点で r より  $\text{ʈ}$  の方が舌の位置が前にあると考えられる。よって、k r による歯擦音のそり舌化も調音点の同化 (k の場合は部分的な同化) とみるのが妥当であろう。

#### ②例外と不規則性

歯擦音のそり舌化は後ろにそり舌半母音/母音がある場合には (iia) にあるように阻止される。そり舌化の阻止は (iib) のように r が歯擦音と隣接していない場合にも起こるが、例外もあり、(iic) のように後ろにそり舌半母音/母音があってもそり舌化が起こる場合もある。このような制約があるのは r/r̄/r̄̄ の場合のみである。

(ii) a. *tisra*, *tisr̄bhiḥ*, *usrās*, *sisrate*  
b. *sisarti*, *tistiré*, *pispr̄śas*

c. *viṣṭīr*, *nīṣkr̄tā*-, *viṣpardhas*

この他にもサンスクリット語の歯擦音のそり舌化は説明の困難な例外が多いことでも知られているが、ほとんどが母音の後ろである。例外は (iia) のように条件を満たすのにそり舌化が起こらない場合と (iib) のように条件を満たさないのにそり舌化が起こっている場合の両方がある。

(iii) a. *ṛbīsa*-, *kīstā*-, *busā*-, *bṛsaya*-  
b. *āṣa*, *caṣāla*-, *jālāṣa*-

不規則性が顕著なのは s で始まる動詞語根の重複形で、(iva) のように規則的にそり舌化が適用する例、(ivb) のように条件を満たすのに適用しない例、(ivc) のように後続するそり舌半母音/母音により歯擦音のそり舌化が阻止される例がある。

(iv) a. *siṣāsan*, *siṣāsasi*, *siṣakti*

b. *sisicus*, *sisice*; *sisakṣi*, *susnuṣe*

c. *sisarṣi*, *tistire*, *sisṛtam*, *sisrate*

(iia) (ivb) に見られるようにほとんどの例外が高母音の後ろで、k の後ろでは例外なくそり舌化が適用、r/r̄/r̄̄ の後ろの位置で多少の例外が見られるのみである。他方、(ivb)

のように本来ならそり舌化を誘発しない母音 a の後ろではそり舌歯擦音が見られるのに対して、k r 以外の子音の後ろの位置ではそり舌歯擦音は生起しない。

#### ③起源と発達

以上見てきたように歯擦音のそり舌化を引き起こす音には歯茎より後ろという調音上の共通点はあるものの、明確な相違点もある。まず、サンスクリット語のそり舌化では r/r̄/r̄̄ のみが歯擦音の後ろの位置でそり舌化を阻止する。次に、例外は r/r̄/r̄̄ 以外の母音の後ろにほぼ限定される。また、ヴェーダ期にはそり舌化は複合語や句レベルなどより適用範囲が広がったが、これも母音の後ろの位置に限定される。次に、通言語的には子音 r と後舌高母音 u はそり舌化を引き起こすことが多いのに対し、前舌高母音 i は典型的に脱そり舌化の条件となったり口蓋化を引き起こす (Hamann 2003, Kochetov 2011)。k はそり舌化の条件としての報告例はない。

これらのことから単一の過程に見えるそり舌化はそれぞれの適用条件により独立した過程が融合したものと考えられる。すなわち、前インド・アーリア語において r/r̄/r̄̄ u k i それぞれの位置での歯擦音の調音点の後退が、もともとそり舌音を欠いていたインド・アーリア語におけるそり舌音の発達と相まって最終的にそり舌歯擦音になったのであろう。

(4) (1)~(3) で見てきたように、半母音の多様性・重子音化・歯擦音のそり舌化のいずれも調音上の特徴、特に口腔ジェスチャーが音韻現象の基盤となっており、一見特異な重子音化や歯擦音のそり舌化は類似した複数の過程が融合したと解釈することにより、より説得力のある分析を達成することができる。

今後の展望として、重子音化が正確にいつ頃始まりどのように拡散していったかを文献に基づいて解明し、中期インド・アーリア語の同化との関連を最近の音声学・音韻論の知見に基づいて追求する必要がある。また、歯擦音のそり舌化は、共時的レベルにではリグヴェーダの動詞の重複形におけるそり舌化や句レベルのそり舌化の事実関係の整理と解釈、当該現象と鼻音のそり舌化との関連、通時的レベルではリグヴェーダ・ヤジュルヴェーダ・アタルヴェーダ間のそり舌化の比較、サンスクリット語における歯擦音の発達との関連を解明するのが有益であると考えられる。

#### 引用文献

- Allen, William Sidney. 1953. *Phonetics in Ancient India*. London: Oxford University Press.  
\_\_\_\_\_. 1962. *Sandhi*. The Hague: Mouton. Second printing.  
Blevins, Juliette. 2004. *Evolutionary Phonology*. Cambridge: Cambridge

- University Press.
- Cardona, George. 2013. "Developments of nasals in early Indo-Aryan: Anunāsika and anusvāra." *Tokyo University Linguistics Papers* 33: 3-81.
- Côté, Marie-Hélène. 2000. *Consonant cluster phonotactics: A perceptual approach*. Boston, MA: Massachusetts Institute of Technology dissertation.
- Hamann, Silke Renate. 2003. *The phonetics and phonology of retroflexes*. Ph. D. dissertation, University of Utrecht.
- von Hinüber. 2001. *Das ältere Mittelindisch im Überblick*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Hock, Hans Henrich. 1991. "Dialects, diglossia, and diachronic phonology in early Indo-Aryan." In Boltz, William G. & Shapiro, Michael C. (eds.) *Studies in the historical phonology of Asian languages*, 119-159. Amsterdam: Benjamins.
- Kochetov, Alexei. 2011. "Palatalization." In Marc Oostendorp et al. (eds.). *The Blackwell Companion to Phonology*, 2: 1666-1690. Chichester: Wiley-Blackwell.
- Suzuki, Yasuko. 2002. "Consonant cluster changes in Pali." 『関西外国語大学研究論集』第75号 pp.97-125 第76号 pp.63-86.
- \_\_\_\_\_. 2012. "Sanskrit gemination as lengthening." In Jared S. Klein & Kazuhiko Yoshida (eds.), *Indic Across the Millennia*, 193-208. Bremen: Hempen.
- \_\_\_\_\_. 2013. "On characterizing Sanskrit anusvāra." Shu-Fen Chen & Benjamin Slade (eds.), *Grammatica et verba*, 282-297. Ann Arbor: Beech Stave Press.
- Varma, Siddheshwar. 1929. *Critical studies in the phonetic observations of Indian grammarians*. London: Royal Asiatic Society.
- Wackernagel, Jakob. 1896. *Altindische Grammatik. Band I. Lautlehre*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Whitney, William Dwight. 1889. *A Sanskrit Grammar*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① Yasuko Suzuki. The class of semivowels in Sanskrit. 『関西外国語大学研究論集』第100号 pp. 1-19. 2014年 査読あり

② Yasuko Suzuki. On characterizing Sanskrit gemination. 『関西外国語大学研究論集』第102号 pp. 1-18. 2015年 査読あり

③ Yasuko Suzuki. Sanskrit RUKI revisited. 『関西外国語大学研究論集』第104号 2016年 (予定) 査読あり

[学会発表] (計1件)

鈴木保子「サンスクリット語重子音化の起源と発達について」日本歴史言語学会第4回大会、国立民族学博物館(大阪府吹田市) 2014年11月30日

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

鈴木保子 (SUZUKI Yasuko)  
関西外国語大学外国語学部准教授  
研究者番号：00330225

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：